SANKEI NOVELS

陽炎たち（かげろう）

下

村松友視

陽炎たち(下)

昭和59年12月25日　1刷　　定価690円

著者――――――――――――村松友視

発行者――――――――――――神谷光男

発行所――――――――――――株式会社 サンケイ出版
東京都千代田区麹町6-1-25 〒102
TEL.(東京)234-1591(代)
大阪市北区梅田2-4-9 〒530
TEL.(大阪)343-1221(代)

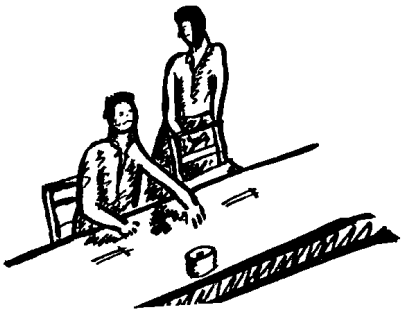
印刷所――――――――――――堀内印刷所

製本所――――――――――――田中製本

●万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします。
©村松友視　1984 Printed in Japan.(検印省略)
ISBN4-383-02361-4

炎（ろう）たち ㊦

村松友視



目次

第七章 5
第八章 43
第九章 109
第十章 147
第十一章 208
第十二章 236

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

AD／長友啓典
デザイン／漆畑一己＋K_2
カバーイラスト／長友啓典

第七章

今日子は、目の前にいるNをしばらく見つめていた。Nは、そんな今日子の視線を知っていて、両膝に腕を突き立てた、例の緊張の姿勢をくずそうとしなかった。

(この人、また演じてる……)

Nの下唇を突き出しかげんにした伏し目がちな表情は、テレビ画面でのそれと同じだった。Nにとっては、テレビ局の人間である今日子の視線も、テレビ・カメラのごとき存在であるのかもしれなかった。今日子は、奥さんが子供を妊っていたことを、どのように告げたらいいか分らずに、Nの様子をさぐるようなかたちとなっていた。

「就職の件、大分あつまったみたいよ」

今日子は、とりあえずというふうに、Nに対する就職口が、テレビ局宛にかなり届いていることを告げた。Nは、同じ姿勢のまま、じっとコーヒー・カップに目をおとし、今日子の言葉に反応するけはいを見せなかった。

「その中から、どれかを選ばなくちゃね……」

今日子がそう言うと、Nははじめて顔をあげた。その表情が、弱々しいがかすかに挑戦的な色を帯びていることに、今日子は気づいた。それは、今日子に向けての挑戦的態度というふうではなく、Nの軀の中にある芯のようなものが、ふわりと浮上したといった感じだった。

「その中から、選ばなくちゃならないんですか」

Nは、下唇を突き出したまま、ぶっきらぼうに言った。そのときのNの表情、仕種、声音が、今日子は誰かに似ているような気がした。それは、テレビ・タレントの誰かだと思ったのだが、その名前を探し当てることができなかった。そして、しばらくしてから今日子は、テレビ・

タレントのあれやこれやが合体しているイメージだということに気づいた。ロック歌手のインタビューへの答え、アイドル歌手の舞台上でのあいさつ、レポーターに追いかけられたスキャンダル・スターの表情……そんなものが、Nの中にごちゃまぜになって宿っているようだった。そして、それらの存在が相手に対して抱いている高飛車な気分を、いま目の前にいるNも共有していると思ったとき、今日子の中にかすかな苛立ちが生じた。

「選ばなくちゃいけないってことはないのよ……」

今日子は、わざとそう言ってみた。仕事が見つからずにいるNにとって、テレビを通じて手をさしのべてきた人々は、いわば地獄で仏のような存在であるはずなのだ。

仕事を失った自分に対する救いの手に、Nはすがりつかざるを得ない状態にいるはずなのだ。それにもかかわらず、何かを演じるようなポーズで自分に対しようとしているNに対して、今日子に嫌悪感が生じた。そして、少しサディスティックな気分の中で、Nに対する自分の声音までもが、微妙に変化していることに気づいて、今日子はちょっといやな気持になった。

「いや、けっきょく選ばなきゃならないんですけど……」

Nは、そんな今日子のけはいを察したらしく、語調が少しやわらかくなった。こんなふうに敏感に反応するNを見て、今日子の中に湧いた嫌悪感は、ますますふくれあがっていった。

「まあ、選ぶっていうのは第三者の言うことで、あなたにとっては、そういう言葉を使う権利はないんじゃないかしら」

「権利……」

「権利っていうよりも、適当じゃないって感じね、選ぶって言葉が」

「今の僕には、ですか……」

「ええ」

「僕は、何か悪いことをしたんだろうか……」

Nは、考え込むような顔をつくった。しかし、それは本当に考え込むというよりも、そういう表情を今日子に見せているといった感じが強かった。

(かなりの、演技派だわ……)

今日子は、そんなNのありように少し感心してしまっ

た。
「べつに、あなたが悪いことをしたとは、誰も言っていないわよ」
「でも、選ぶっていう言い方が傲慢に聞えるっていうのは……」
「それは、困っているあなたに手をさしのべてくれている人に対して、ちょっと軽い言い方じゃないかと」
「僕、べつに困ってませんけど……」
「だって、あなたは自発的に、テレビの中で視聴者に向って就職をお願いしたのよ」
「それは、認めます」
「だから……」
「でも、あれは僕なりの、奥さんやご主人に対する安心のさせ方だったですから」
「それ、どういうこと……」
「ああいうふうに言えば、奥さんは安心してご主人の所へ帰れるし、ご主人も安心するでしょう」
「でも、あのときは奥さんが急に、ご主人の所へ帰るって言い出したのよ」
「そうです、ですから……」
「あなたは、奥さんをなぜ引き止めなかったの」
「だって、奥さんはご主人の所へ帰りたいって言ったんですから……」
「それはそうだけど、あなたの考えっていうものはどうなってるの」
「僕は、自分の主観を云々する立場じゃないと思ってますから……」
Nは、ちょっと胸を張ってから、自分の言葉をかみしめるように言った。さっきとは裏腹な態度をあらわしたNを、今日子は不快に思った。ひとの気持をあやつろうとする神経が、Nの中に抜きがたくあるらしい。今日子は、わざとNの言葉を無視していた。
「だから、どうすればみんなが安心するか……それを考えたんです」
「で、ブラウン管を通じての就職のお願いを」
「ええ」
「じゃ、プランなのね」
「プラン?」

「本当に就職したいんじゃなくて、そういうセリフをその場で言うというプラン」
「まあ、言ってみればそうです」
Nは、またちょっと胸を張った。自分のとっている行動が、すべてある筋道にそっていることを確信しているようだった。
「じゃ、奥さんが家を出るって言ったとき、一緒に出ることに決めたのはどういう気持なの?」
「それは、奥さんにとってそれがいちばんいい方法ならば、そうすればいいんじゃないかと……」
「でも、ご主人はどうなるの、その場合」
「……」
「ご主人だって、あなたがお世話になっている方でしょ」
「それは、そうです」
「その、ご主人に対しての気持はどうだったの」
「ご主人は、奥さんが出てゆくことをそんなに気に病んではいなかったと思います」
「それは、夫婦の仲が冷え切っていたということ?」
「ええ、平たく言えばね」

今日子の紋切型の表現を、すかさずチェックしてみせたNには、ある種の余裕すら感じられた。それではまるで自分が救世主とでも言ってるみたい……今日子は、心内の苛立ちを表現する言葉がみつからず、もどかしい思いをかみしめていた。
「じゃあ、ご主人はどうしてテレビ局へ捜索を依頼したのかしら」
「さあ……」
「それは、ご主人のお母さんに対する気持がそうさせたんだと、あなたは言いたいわけかしら」
「そう言われてみれば、そうも言えるような気がします」
「そう言われてみればって、いま、あたしが言ったから思い当ったってこと?」
「ええ」
「うそ……」
今日子は、はじめて自分の気持を直に言葉に出して言った。
いつになくNが饒舌なのは、あきらかに相手が自分という女性だからだ……今日子は、そういう腹立たしさか

らも、「うそ……」という言葉をNにぶつけたのだった。
そう言われてNは、びっくりしたように今日子をみつめた。だが、それはほんの一瞬のことで、また例の演じる表情にもどった。それは、自分の気持を正直に表現したとは言え、「うそ……」という感情的な言葉を発したことにとまどっている、今日子のかすかな表情を見て取ったからにちがいなかった。
「うそって言うと……」
Nは、すかさずそう問い返した。
「お母さんとご主人の関係は、あなたはとっくに知っていたはずです」
「それはまあ……」
「それを、あたしに言われてそう思ったなんて、うそに決っているわ」
「でも、そう思ったんです」
「……」
「さっきは、そう思ったんです」
「……」
「だから、うそではありません」

今日子は、こういう会話で追及していっても、自分の表現力では勝負になりそうもないと思った。こんなとき、鍋島や加島や水木ならば、相手の手に乗ったふりをして、ちゃんとしめしをつけることができるのだろうが……今日子は、それのできない自分を少し情ないと思った。しかし、こんな会話のやりとりに長ける必要もないという気もして、手に持ったコーヒー・カップを口に持っていった。
「冷えたでしょう、コーヒー」
Nは、今日子のしぐさをじっと目で追っていたらしく、そんなことを言った。
「あたし、冷たいコーヒーって好きなの……」
今日子は、我ながら陳腐なセリフを吐いたなと後悔したが、そのまま居直ったように冷たいコーヒーを飲み干した。
「手首が、細いんですね」
Nは、そう言って含み笑いをした。今日子は、男として自分を観察しはじめたNを感じ、このままでは奇妙な時間になってしまうと思った。Nが自分の手首のことを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

口にしているということは、首筋や胸のあたりにも、あきらかに不遠慮な視線をおくっているにちがいないのだ。
(奥さんは、こんな手に弱い女なのかな……)
そうも思ったが、自分を女として見てくれる男に対して、嫌悪感を抱きながらも、そこに微妙な快感がまじっていることに今日子は気づいた。
「あのね、ちょっと伝えなきゃならないことがあって……」
今日子は、ここまでの時間のありようを挽回すべく、そう言ってじっとNを見た。Nは、今日子のそんなけはいを、またもや鋭く察知したらしく、一応、背を伸ばして今日子をまっすぐに見るかたちをとった。
「奥さん、おなかに子供がいたのよ……」
今日子は、自分が相手をおどすような声音になっていることを少し気にしながらも、やや語尾に余韻をもたせて言った。
「……」
Nは、一瞬、何かを言おうとしてそれを抑えたらしく、唇をゆがめた。厚ぼったい下唇が、例の演技の表情をつくっていたが、心なしかその顔からいきおいが失せていた。
「あのね、奥さんのおなかに子供がいたの……」
「ぼくの?」
Nは、少年のような怯えをあらわしながら、今日子に聞いた。今日子は、見る見るうちに弱くなってしまった相手を、哀れむように見ていた。
「子供って、ぼくの?」
「さあ……」
「さあ?」
「そんなこと、あたしに聞かれても分るわけないじゃない」
「それは、そうですね……」
Nは、黙ってコーヒー・カップに目をやっていた。
「あなた、自分の子だっていう確信ないの」
「……」
「じゃあ、ご主人の子供なのかしら」
「……」

「とにかく、奥さんはおなかに子供を妊(みごも)っているのよ」
「で、ご主人は……」
「さっきから気になってるんだけど、あなたどうして、あたしたちと同じように木村さんのことをご主人って呼ぶの」
「え……」
「あなた、まるであたしたちと同じ第三者みたいな呼び方してるのよ」
「……」
「自分を、ドラマの登場人物かなんかみたいに思ってるんじゃないの」
「そんなことはありません……」
「いいえ、そうに決ってるわ」
「あなたは、そういうふうに人を決めつけるタイプなんですか」
「決めつけるわけじゃないけど……」
「ちがうタイプだと思ったんだけどなあ」
Nは、今日子の表情をうかがった。今日子は、それを無視すれば、視線が自分の肢体を舐めるようにうごくことを想像して、Nの目をまっすぐに見すえた。
「あたしのタイプがどうだろうと、あなたには関係ありません」
「はあ、それはそうですね」
「とにかく、奥さんのおなかには子供が宿ってるんです、それをあなたにあたしは伝えているんです」
「はあ、それは分りました……」
Nは、軀の中を駆けめぐる想念を、もちあつかいかねたように呟いた。
「で、どうするんですか……」
今日子は、たたみかけるように言った。だが、Nはすでに自分のペースをとりもどしていた。
「どうするって?」
「あなた、ショックじゃないの」
「奥さんのおなかに子供がいたことですか……」
「もちろんです」
「べつに、ショックということは……」
「じゃあ、何でもないのね、それを聞いても」
「いや、何でもないと言うか……」

「とにかく、あんまり気にとめるほどのことじゃなさそうね」
「それで、ご主人はどう言ってるんですか」
「さあ、そこまでは知らないわ」
「じゃ、奥さんは……」
「あなた自身はどうなの、その赤ちゃんはあなたの子供かもしれないのよ」
「……」
「そういう感情はないの、あなたって……」
Nは、突然、だまり込んだ。しかし、それは言葉に窮したというのではなく、あなたに言っても分らないといったふうな、突き放した沈黙だった。
今日子は、いよいよNという青年の感性をつかみきれなくなった。Nは、奥さんが子供を妊っているという事実に、少なからずショックを受けている……これはあきらかなのだ。だが、そのショックを今日子に伝えないよう気をくばっているようだ。その態度はあたかも、次のテレビでの対面のシーンを想定し、自分のセリフを温存しているかにさえ思えるのだ。テレビの中における自分の役を考えつづけている……そういう不気味さが、Nの沈黙からはくみ取れるような気がした。
「次は、いつなんですか」
「次って……」
「次のテレビはいつですか」
「さあ……」
「さあって、そのことで来たんじゃないんですか」
「あたしはただ、赤ちゃんのことを知らせるために来ただけですよ」
今日子は、わざとそう言ってみた。すると、Nの表情にはあきらかに失望の色が浮んだ。今日子は、心の中でかすかな心地良さを楽しんだ。
(いやな性格になりそう……)
Nに対して互角の勝負をしようとしているうち、自分までもがやたらに計算ずくの言葉を吐くようになっていることに気づき、今日子は浮かぬ顔になった。
「じゃあ、もうテレビはないんですか……」
Nは、今日子の顔をのぞき込んだ。
「いいえ、あなたの気持によっては、もう一回だけやる

かもしれないわ」
「僕の気持……」
「赤ちゃんができたと知って、あなたがどう変ったか……それによって番組が成立したり、しなかったりするというわけ」
「そりゃあ、やっぱりたしかめたいです……」
Nは、急にあかるい声を出した。それは、子供や奥さんに対する感情のたかぶりではなく、あきらかにテレビに出演できる可能性に対するあかるい表情だった。
「自分の子かどうか、それをたしかめたいの」
「それに、奥さんがその子をどうするつもりなのか」
「どうするつもりって、生むつもりかどうかっていうこと?」
「それも、あります」
「そのほかに、どんな……」
「生んだあと、どうするのか」
「その赤ちゃんを?」
「ええ」
「生んだあとどうするって……」

今日子は、Nの言っていることがよく分らなくなった。生んだあとどうするか……そう言うNの言葉の裏には、その子供が誰の子であるかを考えあぐねている様子があった。自分の子かご主人の子か……それによって、奥さんがその子供をどうするかは、たしかにちがってくる可能性はある。
「あなた、赤ちゃんができてるって気づかなかった?」
「ええ……」
「そんなもんなのかしらねえ」
「……」
「ずっと一緒に旅してて、気がつかなかったの」
「ええ」
「へえ……」
今日子は、奥さんの身になって考えている自分に気づいた。自分が奥さんの立場になるということは、その相手としてNを想定しなければならない。いや、その上に夫を考えなければならないのだから、そうやったところで奥さんの気持にはせまれない気がした。
「どっちなんでしょうね……」

Nが、突然、そう言った。
「どっち……」
「その赤ちゃんの親」
「どっちって、あなたかご主人かっていうこと？」
「ええ」
「それは、奥さんに聞いてみなくちゃ分らないわね」
「彼女に聞けば、分るのかなあ……」
「え？」
「彼女には、分ってるのかなあ」
今日子の頭に、「第三者の子かもしれない」という自分の説を浮べてNを見た。Nでもなく夫でもなく、第三者の子供を宿している可能性を、Nも考えの中に入れてしゃべっているのだろうか……今日子は、ふとそんなふうに思いはじめた。

今日子は、とにもかくにも奥さんのおなかに子供がいることをNに伝え、そのことを前提として番組に出る意志のあることを確認して局へ帰った。加島と水木の姿は見当らず、加島の席になぜか鍋島が坐っていた。

「おう、お帰り」
「あら、鍋島さん、どうしてこんなところに……」
「いやね、番組が近づいてきてみんながうごき出すと、俺だけ取り残されたみたいで落ちつかないんだよ」
「それで、加島さんの席へ」
「いや、水木ちゃんの席でもよかったんだけどね、何となく今日子ちゃんがまずここへ来るような気がしてさ」
「どうして……」
「だから、何となく、だよ」
「……」
「どうだい、お茶でも」
「あ、いいですね」
鍋島は、何か含みでもあるかのように、いたずらっぽい目をして今日子を誘った。今日子は、自分の中のどこかに鍋島と話をしたいという気持があったらしいことに、自分の返事の調子で気づいた。
「で、どうだったN君は」
「出る気持はあるそうです」
「子供の件ではショックを受けてた？」

「いいえ」
「ほう、精神的にタフな男なのか」
「そうじゃなくて、何だかピンとこないみたいなんです」
「なるほど、それも分るな」
「分りますか……」
「ああ、何となくね」
「そういうものなんですか……」
「で、赤ちゃんが自分の子だってことも、ピンときてないんだろ」
「そうらしいんです」
「それも、分るな」
「そうですか……」
「今日子ちゃん、加島ちゃんと飲みに行ってるかい」
「え……」
「いや、ちょっと気になってさ」
「あたしと加島さんの仲が、ですか」
「うん」
「どうしてかしら」
「どうしてってこともないけど、何となくね」
「また、何となく、ですか」
「そう、何となく気になるんだ」
「加島さんに奥さんやお子さんがいらっしゃるからですか」
「ま、それもある」
「あたしが、まだ若すぎるからですか」
「うん、それもあるな」
鍋島は、パイプの掃除をはじめた。今日子はその手元をながめながら、なぜか浮き浮きとした気持になった。
パイプの掃除をしている手には、細かい皺が無数にきざまれていた。五十年輩にしては、年老いた手かもしれない……そう思って、今日子は鍋島の手元をながめていた。今日子の目のうらに、加代のおかみの顔が、一瞬、浮んだ。
「俺はね、あんたたちにちょいと興味もってるんだよ」
「あたしと加島さんに、ですか」
「うん」
「どうしてでしょう」
「さあねえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong